

完成予想モデル 1/10 ①



完成予想モデル 1/10 ②



完成予想モデル 1/15 ①



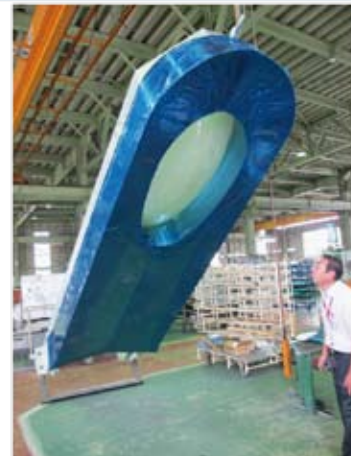
完成予想モデル 1/15 ②



本体ガラス部
制作組み立て 1



本体ガラス部
制作組み立て 2



受託事業名：

中条ロータリークラブ創立50周年記念モニュメントデザイン監修業務

発注者：中条ロータリークラブ創立50周年記念実行委員会

受託期間：平成23年2月10日～平成23年3月31日

プロジェクト主査：小林花子（美術・工芸学科 准教授）

●受託概要

中条ロータリークラブ創立50周年の記念式典に合わせ、創立記念事業としてモニュメントをJR中条駅前広場敷地内に寄贈する運びとなった。それに伴い、学生のコンペ形式によるモニュメントデザイン案の提出とデザインの監修業務を行った。

●モニュメントテーマ

『自然が活きる、人が輝く、交流のまち』

●学生コンペ実施内容

学生に向け、モニュメントデザインコンペ募集要項を作成・募集を行った。

応募内容：

胎内市の未来へのテーマをイメージするモニュメントで、JR中条駅前広場の景観に調和するものを提案する。

条件：

テーマに即したもの。

JR中条駅前広場の景観に適合するもの。

屋外の設置に構造上の問題がなく、人が触れても危険性がないもの。

制作が可能な形態であり、耐久性を十分に考慮した素材を使用するもの。

応募方法：

申込書（1、2）とマケットもしくは設計図の提出。

賞：

最優秀賞 1点

応募作品を作品選考委員にて審査し、デザイン採用者には中条ロータリークラブより奨学金が進呈される。

コンペ実施期間については、記念式典および除幕式予定日に合わせたモニュメントの設置と実制作期間を考慮し、応募デザインの見直しと提出書類・マケットの監修期間を確保するため、2010年1月下旬までと設定した。

●応募デザインと結果

卒業・修了制作展間近であったため、建築・環境デザイン学科3学年の学生1名と大学院造形研究科の学

生2名の共同案の2案のみの応募となった。2案ともに実現性に多くの問題を抱えていたため、提出案の講評文と問題点の改善案を作成し、依頼者にデザイン選考をお願いすることとした。

結果、胎内市を象徴する鳥である「ヤマセミ」と中条駅からのぞむ「櫛形山脈」をモチーフとしたモニュメントのデザインが採用されることとなった。

●採用デザイン概要

コンセプト・デザイン説明：

テーマから、自然をモチーフとした作品に触れることで、人の内面にひとときのやすらぎや感化をもたらし、また中条駅を利用する人々の間でひとつの共有項となるようなモニュメントを提案する。

胎内市を象徴する鳥である「ヤマセミ」が何気ないしぐさで鳥坂山の方を振り返っている様子を表した。また、駅正面の「板額御前像」と同じ方向を向かせることでモニュメントを観ている人にも鳥坂山をのぞんでもらいたいと意図している。

下部には中条駅からのぞむ「櫛形山脈」をモチーフとした山並みを駅から正面に見える実際の山脈に重ねて配置する。山脈にはヤマセミがとまっている。記念として、後々まで人に愛されるような存在になるには、もともとあるものとの関係や導線を考慮した上で、より人に身近な場所で観てもらうことが大切ではないかと考え、高さや位置の決定をした。像全体の高さは木の周囲にあるベンチに座った際の、人の目線から無理なく見上げられる高さになっている。

胎内市は豊かな山や自然に恵まれているが、地元にいるとあまりの何気なさからその存在に気づくことがない場合があるかもしれない。このモニュメントが中条駅の憩いの場を中心として、周囲の人々がふたたび自然に目を向け、興味を持つきっかけとなるとよいのではないと思う。

実作品のサイズ：幅90cm×奥行80cm×高さ180cm

実作品の素材：ヤマセミ／ブロンズ

山脈部分／白御影石

希望設置場所：中条駅広場・正面ステージから20m手前

デザイン：長岡造形大学造形研究科1年 金澤翔太

長岡造形大学造形研究科2年 有坂はるひ



アイデアスケッチ：有坂はるひ

●デザイン修正

①実現性を考慮して作品の形状や素材、サイズを検討する。

②実制作者がデザインを十分に理解できるアイデアスケッチと設置イメージ図、図面等を作成、再提出する。

③図面だけでは伝わりにくい形状や質感、2つの素材の位置関係を表すためにマケットの制作を行う。

以上の3点について指導を行い、デザインする者の責任とデザインした物が現実に作品化することへの問題と自覚を促した。

●学生によるデザインを実現化する場合の問題点

これまで述べて来たように、学生によるデザインを現実の作品として成立させるためには、100パーセント図面化できる形状のものでない限り、特に塑造的な作品の場合はデザインがデザイナーの手から離れた瞬間に全く別の作品になってしまう可能性が高い。

それへの対応策として、ヤマセミ部分の原型をデザイナーが制作し、山脈部分の造形も直接関わることが出来るように制作者に協力を仰いだ。

以下は上記問題点の対応結果の報告（デザイナー及び中条RC、制作者間の調整で行われた）

●実制作

①ヤマセミ原型の制作 デザイナー自ら造形した粘土原型から型取りを行い、石膏原型まで制作した。（ casting is entrusted to Nakajo RC, a casting manufacturer in Saitama Prefecture）



設置イメージ 画：有坂はるひ



マケット・石膏原型制作：金澤翔太 素材：木、石膏

②山脈部の制作 デザイナー制作のマケットをもとに、中条RCが石材加工業者へ加工を委託。各工程にデザイナーが関わり、技術指導を受けながら部分的に実制作も行い、デザイン調整を行った。

●設置

設置位置についてデザイナーと加工業者（制作者）・中条RC・胎内市・JR中条駅が制作コンセプトをもとに協議し最終決定した。

設置空間の性質上、当初予定していた正面とは逆向きとなり、それに伴いヤマセミの位置関係及び山脈部

の造形を変更することになった。デザイナーと制作者が協力して急遽造形を調整し対処した。(こういった対応は制作に関わることで迅速かつスムーズに行うことが出来る)



モニュメント設置状況



ブロンズ製ヤマセミ

●考察

今回の依頼はパブリックモニュメントの学生デザインへの監修のみの依頼であったが、実制作経験の少ない学生がデザインした作品を恒久設置するには様々な問題があった。

特に塑像的な(彫刻的な)モニュメントはデザイナー＝制作者という関係が非常に重要な問題である。その規模により実制作の工程上で委託する部分はあるにせよ、制作全般にわたり、管理調整していくことで初めて依頼者の満足いくものとなり、その意味においてより公共性の高いものとなりうる。

こういった現実を踏まえ、今回の依頼での問題は依頼自体がデザインのみであることと、また制作経験の少ない学生が対象となっていたことにあった。当初の依頼内容のみの関わりでは、その公共性の高さからデザインの社会的・道義的責任が問われるものになりかねないと思われた。

この点を解消し、より公共性の高く依頼者が満足していくものが制作されるように方向付けすることが監修業務内容に含まれるべきであると考えた。また、学生が社会的現実を知り、貴重な体験を積む機会とすることが、将来性の高いデザイナー・作家を生むことに繋がると確信し、このこと自体が大学の行うべき教育ではないかと考えている。

以後このような公共性が高く、より彫刻的な内容の依頼については、現実化する方法や内容も含め十分検討すべきであると強く認識した。



除幕式後風景

受託事業名：

修景事業推進業務

発注者：長岡市

受託期間：平成22年8月26日～平成22年3月31日

プロジェクト主査：渡辺誠介（建築・環境デザイン学科 准教授）

プロジェクトメンバー：大塚英寿、長沼拓、馬場佑太、松澤佑夏（以上学部4年生）、渡辺雅洋（学部3年生）

●はじめに

長岡市摂田屋地区は、醸造関連会社が6社立地し、醸造の町としてまちづくりを進めるマスタープランを策定した。

その一方、当地区は、長岡市の郊外住宅地として、新興住宅開発が進む地区であり、暮らしやすい住宅地として魅力を増進させるまちづくりも並行して進めるべき課題として認識されている。

当地区は、街並み環境整備事業が進められている地区であるため、地域住民のより積極的なまちづくり参加を促すための様々な試みが必要とされている。具体的には、公共空間の美装化では、その効果に限界があるため、住民間でまちづくり協定を取り交わし、個人所有の建造物等においても修景事業が進められることが望まれるのである。

当事業では、プロジェクトメンバーである長岡造形大学生（摂田屋こへび隊）を中心に、地域住民のまちづくり参加推進から修景事業推進に結びつくような活動を模索した記録である。

なお、マスタープランが示す、実際に道路美装化を進める候補地である旧三国街道については、関係者協議に時間がかかっている。このことが、当事業推進に少なからず閉塞感をもたらしている。今年度は「醸造の町のブランディング」ではなく、「摂田屋の住民のまちづくり」へ向けて種をできるだけ蒔くことを核とした。

●まちづくり協定等の策定支援

まちづくり意見交換会（2010年6月30日）



できるだけ、摂田屋地区内の住民が「まちづくり」

に参加している実例を示し、今年度の作業方針を示し、理解を得た。

和島はちすばどおり 見学会（2010年9月12日）



22名参加

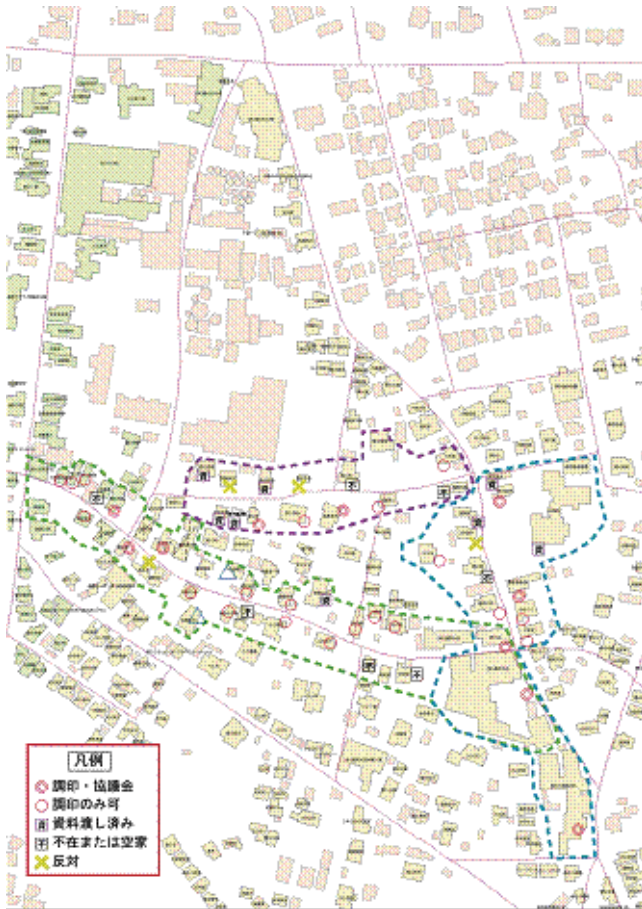
長岡市内で摂田屋地区と同時期に街並み環境整備事業を開始した和島はちすばどおり地区は、まちづくり協定が住民間で結ばれ、すでに住宅の外壁改修に伴う修景が行われている。そこで、摂田屋地区住民とともに、見学および関係者へのヒアリングを行なった。

結果としては、はちすばの活動を賞賛しながらも、摂田屋地区にそのまま参考として導入は出来ない（必要性がない、自己負担費用がない、該当しそうな住民が参加していない）というものであった。

住民戸別訪問（2011年2月～3月）

旧三国街道地区は、関係者間で実際に意見交換がされているとのことで、まちづくり協定に関する認識・可能性に関する戸別訪問を、摂田屋2、3丁目地区の主要な街並み形成地区を中心に行なった。

結果として、これまでの地域での所謂まちづくり活動には、好意的な意見が大半であり、修景を伴うまちづくり協定にも賛成意見が多いことが分かった。しかしながら、実際にその協定を用いて修景する意欲がある住戸は少なく、結果として「おつきあい」で協力する、というスタンスから「まちづくり協議会」などの会議に参加することには躊躇する傾向が見受けられた。



【戸別訪問の結果】

●ワークショップ等の運営支援

抜い樽隊（ぬいたるたい）

当地区でまちづくりワークショップを行うとき、住民参加のメニューとして必要なことは、

「参加しやすさ」

「貢献できた実感」

「今後のまちづくりに参加したく思える」

「様々なステークホルダーの交流」

などが挙げられる。

そこで、昨年度に引き続き、機那サフラン酒本舗の庭の雑草拔きを、住民参加で行う「抜い樽隊」を夏、秋と2回企画し、実施した。

参加には、摂田屋地域住民、NPO醸造の町摂田屋町おこしの会、北越銀行宮内支店、そして長岡造形大学・摂田屋こへび隊が参加し、盛況のうちに終わった。



【抜い樽隊・秋の陣集合写真】

植え樽隊（うえたるたい）

植え樽隊とは、醸造の町・摂田屋にちなみ、樽をプランターとして、ミニ修景事業を地域住民に参加・協力してもらう事業である。

具体的には、「まちづくり意見交換会」「抜い樽隊」「NPO摂田屋まちおこしの会主催 おっここ摂田屋市」などで公開募集し、設置した。

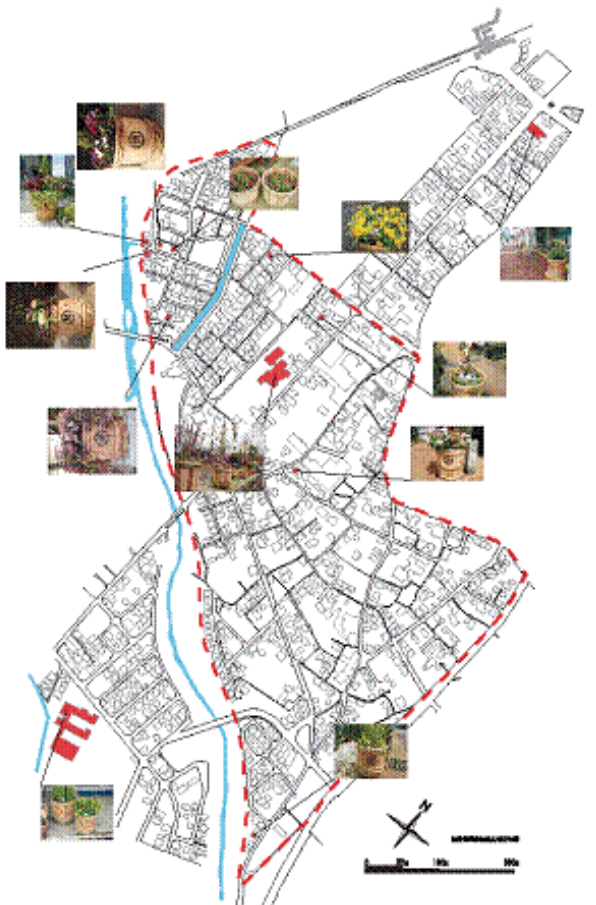
樽に、摂田屋のマークを書き入れ、協力者に好みの草花を植えてもらい、基本的に自宅の前に飾ってもらう活動である。

今年度は12件の実施がすすめられた。しかしながら、設置は摂田屋5丁目など街並み環境整備事業促進区域の外側の地区などで、ターゲットとする地域の参加に結びついているわけではない部分が課題である。



【おっここ市での「植え樽」PRブース】

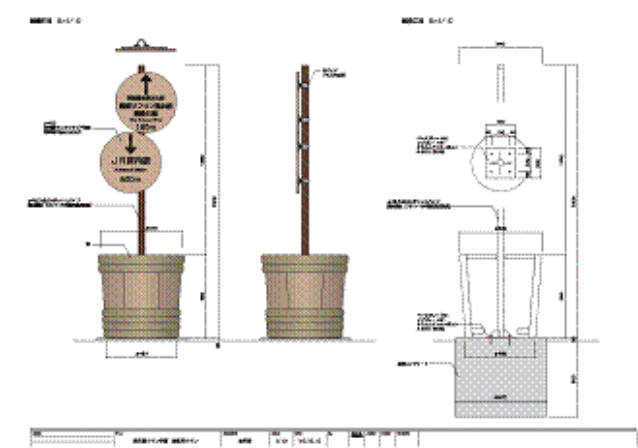
その結果、2脚づつ、摂田屋地区内に実現化した。



【植え樽の分布2010年度】

サインワークショップの成果

昨年度から方向指示サインについてワークショップを実施していたが、コンセプトデザインを実施した。



【教え樽（おしえたる）】



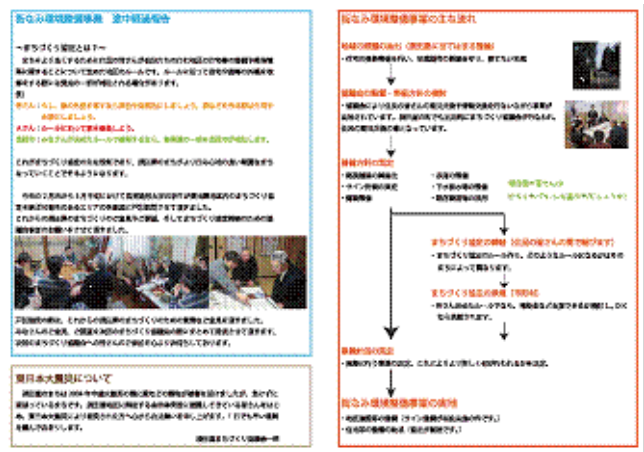
【お知らせ柱（おしらせちゅう）】

まちづくりかわら版作成

4号作成し、地域内で発行配布した。



【第1号 表】



【第2号 裏】



【第1号 裏】



【第3号 表】



【第2号 表】



【第3号 裏】

受託事業名：

南魚沼市坂戸区 震災復興デザイン策定支援業務

発注者：南魚沼市坂戸区

受託期間：平成22年4月1日より平成23年2月28日

プロジェクト主査：渡辺誠介（建築・環境デザイン学科 准教授）

プロジェクトメンバー：上野裕治（建築・環境デザイン学科 教授）、江口祐美、捧ちひろ、橋本みちる（以上学部3年生）、山崎康行（卒業生）

●はじめに

平成16年の中大震災による被災地の復興計画（復興デザイン策定）を支援する事業である。

平成19年度NHK大河ドラマ「天地人」を契機に、直江兼統公ゆかりの地として、来訪者をもてなしつつ、まちづくりを進めようという総意の下、生誕の地である「坂戸」と終焉の地である「米沢」の交流を軸に、復興デザイン策定を支援した。

●地域の景観材となるサインデザインの検討

米沢との交流から「うこぎ」の活用が当地域でも検討されることとなった。その結果、場所をとる設置型のサインは難しいが、移動可能なプランター型のサインであれば、ウコギの植栽の実験と兼ねることができるという認識となった。そこで、直江兼統公のイメージキャラクター「お六君」が地域を案内する「お六もウコギ升（ます）」をデザインし、試作した。



お六もウコギ升 案

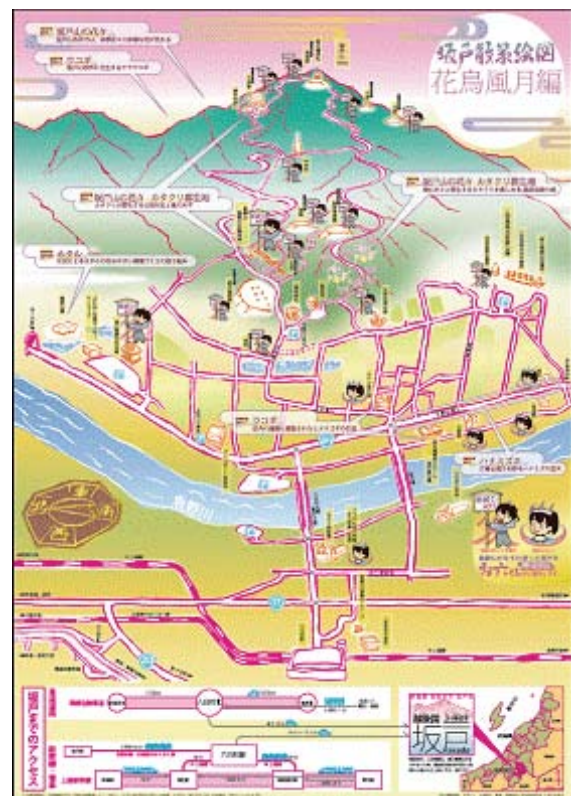
●坂戸散策絵図

昨年度から継続的に住民投稿形式で作成していた坂戸かわら版の原稿を再編集し、散策絵図と名付けたガイドマップ3部作を作成した。このガイドブックは坂戸区に全戸配布されると共に、観光施設等にも配布され、好評を得ている。

【花鳥風月編 表】



【花鳥風月編 裏】



●勉強会

【ホタル環境整備 勉強会 ①】

日時：6月18日(金)

講師：上野裕治 長岡造形大学 教授



ホタルの基本的な生態、ホタル生息環境の在り方を講義いただいたあと、坂戸でのホタル環境整備候補地を踏査した。

その結果、史跡公園周辺の池、埴田、銭淵公園を改良することで、ホタル生息環境が整備できる可能性があるとの指摘を受けた。

【ホタル環境整備 勉強会 ②】



日時：10月9日(土)

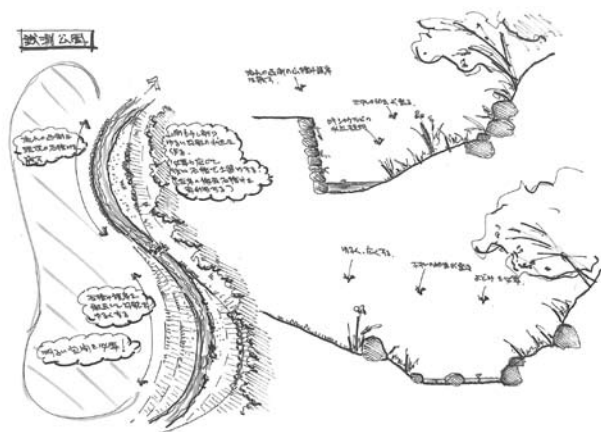
講師：大原久治 雪国植物園 園長

ゲンジ、ヘイケ、ともに復活しているという長岡市雪国植物園に赴き、その整備手法を講義いただき、合わせて現地を視察した。

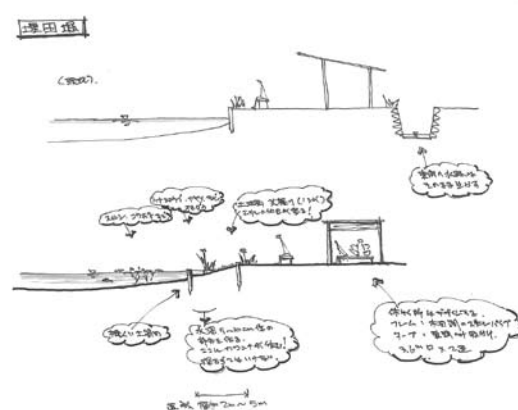
【ホタル環境整備計画の検討】

視察ならびに勉強会の結果、ホタル環境整備案として検討図面を制作した。

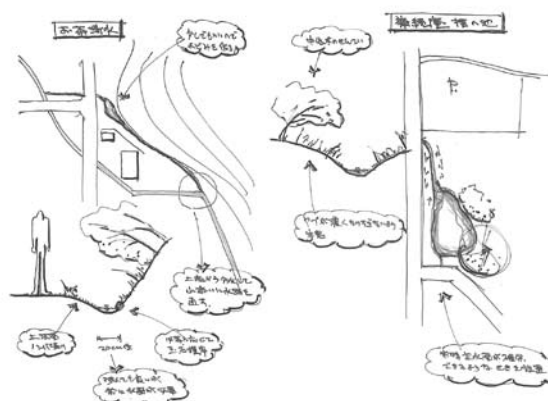
検討図面 1



検討図面 2



検討図面 3, 4



●プラン作成ワークショップ

【子供による坂戸夢マップ作成】

日時：9月10日(金)

内容：六日町小学校 4年生による坂戸地区の夢マップを作成

背景：六日町小は総合学習の一環で、ホタル環境を研究し、銭淵公園にホタルを復活させていたことから、坂戸のホタル環境に子供の視点で提案できる条件が整っていたため。



結果

自然豊かな坂戸の継続と遊ぶ場所が共通に見出された。



【大人による坂戸夢マップ作成】

日時：11月13日(土)

内容：子供による夢マップをもとに、大人版の坂戸夢マップを検討した。

2004年の中越大震災でわかったことは、坂戸区は旧六日町の新興住宅地としての性格も有しており、昼間の住民は高齢者の割合が高いということだった。したがって、仮に被災した際に陸の孤島のような状態になった場合、こうした災害弱者の情報をどれだけ地域が把握しているかが重要だと認識される。

また、坂戸区の住民は、自然環境の保全についてもこれまでの集落の被災経験（坂戸山からの水害等）から極めて意識が高い。

これに加えて、直江兼続公・上杉景勝公、両公の顕彰の地として坂戸のまちづくりがあることは極めて強い地域のプライドであることが再確認された。

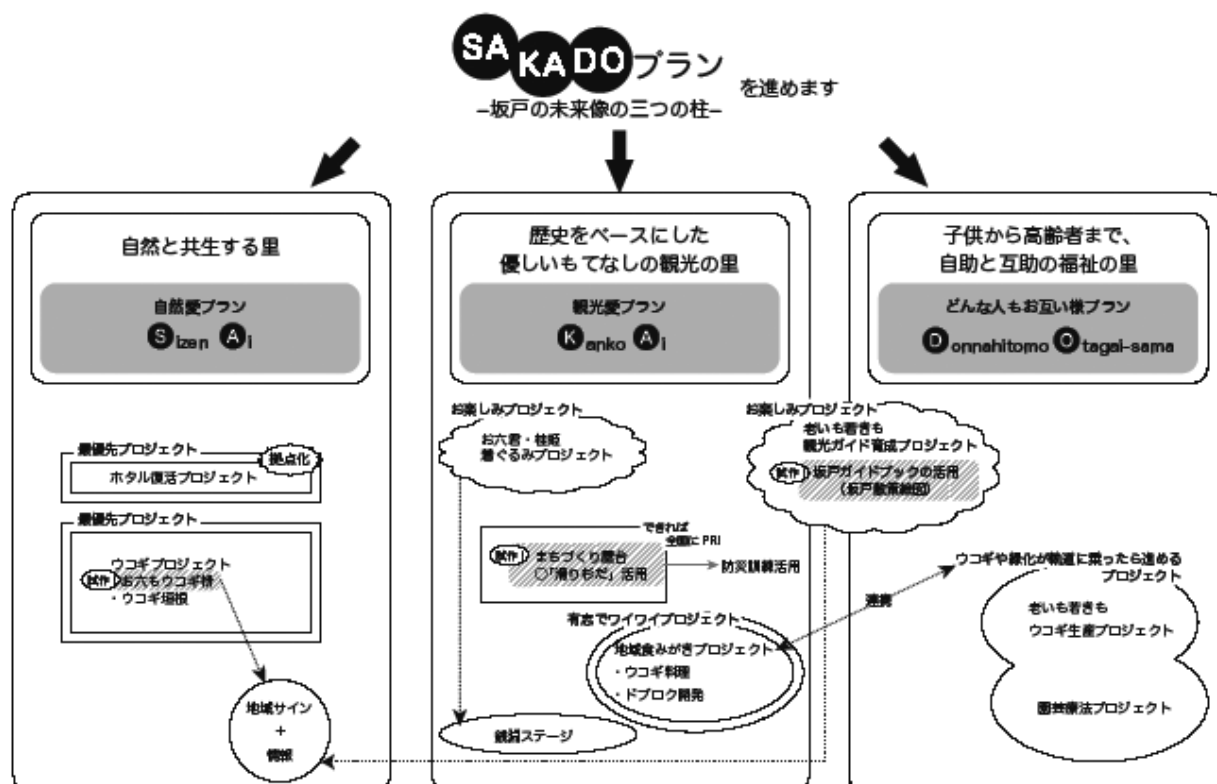
両公顕彰碑を坂戸山に建立したことは、大人坂戸夢マップにもその精神の軸として明記されることとなった。



戦時中にかかわらず両公顕彰碑を建立した有志たち記念写真
(出典：「偉績世に輝く」上田史談会 平成22年)

以上のことから、坂戸の復興デザインには、住民の絆が深まる機会を設けることを横糸に、そして、そのためにも自然環境整備や観光、福祉、雇用機会創出などを縦糸にして考えていこうという構想が求められた。以上のことから、「SAKADOプラン」として、実施する。「SAKADOプラン」は以下の3つの柱のプランからとした。「自然愛プラン：SA」「観光愛プラン：KA」「どんな人もお互い様プラン：DO」

景観公、景観公を創出し坂戸山を育み歴史の誇りと自然に育てられた私達は坂戸プランを進めます。



	プロジェクト	坂戸泉	応援隊
SA 自然愛プラン 坂戸の自然をもっと楽しもう！発信しよう！	ホテル復活プロジェクト	有志 + ハナミズキの会	六日町小学校の子供達 長岡市曹田小学校
	ウコギプロジェクト お六もウコギ畑 ウコギ畑復元	50 世帯 (地区内 10% 目標) + ハナミズキの会	地元造園業者さん 米沢ウコギ畑の会
KA 観光愛プラン 皆で楽しんでもてなして稼ぐ観光	お六も着ぐるみ 観光ガイド育成プロジェクト	有志	長岡造形大学 山の暮らし再生機構 観光協会
	まちづくり基金 「通り杉だ」活用プロジェクト	有志	杉だらけクラブ (全国)
	お六君・桂坂着ぐるみプロジェクト	坂戸観光関連施設	観光協会
	地域食みがきプロジェクト ウコギ料理 お六 (ドブクロ)	有志 (坂戸おかあちゃん会) 有志 (坂戸おとうちゃん会)	米沢おかあちゃん会 ドブクロ特区のみなさん
DO どんな人もお互い様プラン 子供から高齢者まで、 自助と互助の福祉を進めよう	お六も着ぐるみ 観光ガイド育成プロジェクト	地元 小・中・高 高齢者有志	観光協会 上田を説会
	お六も着ぐるみ ウコギ生産プロジェクト	ウコギ生産有志 坂戸飲食店	米沢ウコギ畑の会 地元造園業者さん
	園芸療法プロジェクト	坂戸緑化隊 高齢者施設	地元 園芸療法アドバイザー (例、北越大学、保健衛生専門学校)

0. 業務の概要

国営越後丘陵公園では既にオープンしている「健康ゾーン」に引き続き「里山フィールドミュージアムゾーン」を整備中であり、その中核施設として「里山交流館」およびその周辺の「花の水辺区」が現在施工中である。そのような中、里山交流館の利活用方法については「里山交流館利活用検討委員会」（山下秀之教授座長）が設置され、その外構検討部会メンバーとして上野が参加し、里山交流館外構および花の水辺区全体のデザインや利活用方法について検討を重ねてきた。本業務は、検討委員会事務局よりデザイン研究開発センターが委託を受け、その検討過程の支援に当たったものである。具体的には、棚田の跡地を集客力のある、また自然環境学習の場としても活用できる生物棲息環境とする方法の検討、委員会メンバーほか関係者および来園者が理解しやすいような模型の制作が主な業務である。

1. 「花の水辺区」整備の前提

里山交流館外構および花の水辺区全体の整備にあたっては、次のような項目を前提条件として確認した。

- 1) 里山交流館との内容的、デザインの連続性を重視する。
- 2) 「花の水辺区」のほか本ゾーンには「里の水辺区」「山の水辺区」「はなの森」が設定されておりこれらの区分を明確にする。
- 3) 集客力があり来園者に親しまれるような美しい植生環境、生物棲息環境を創出する。
- 4) 休耕田のあらたな展開方法を提案する。
- 5) 植栽する植物はこの地域の在来種を基本とする。

2. 「花の水辺区」整備のテーマ

本区域の整備にあたっては、棚田跡地の利活用ということが大きなテーマであり、国営公園としての立場から全国的な要望ともいえるこのテーマに一つの回答を示したいと考えた。そのテーマは、

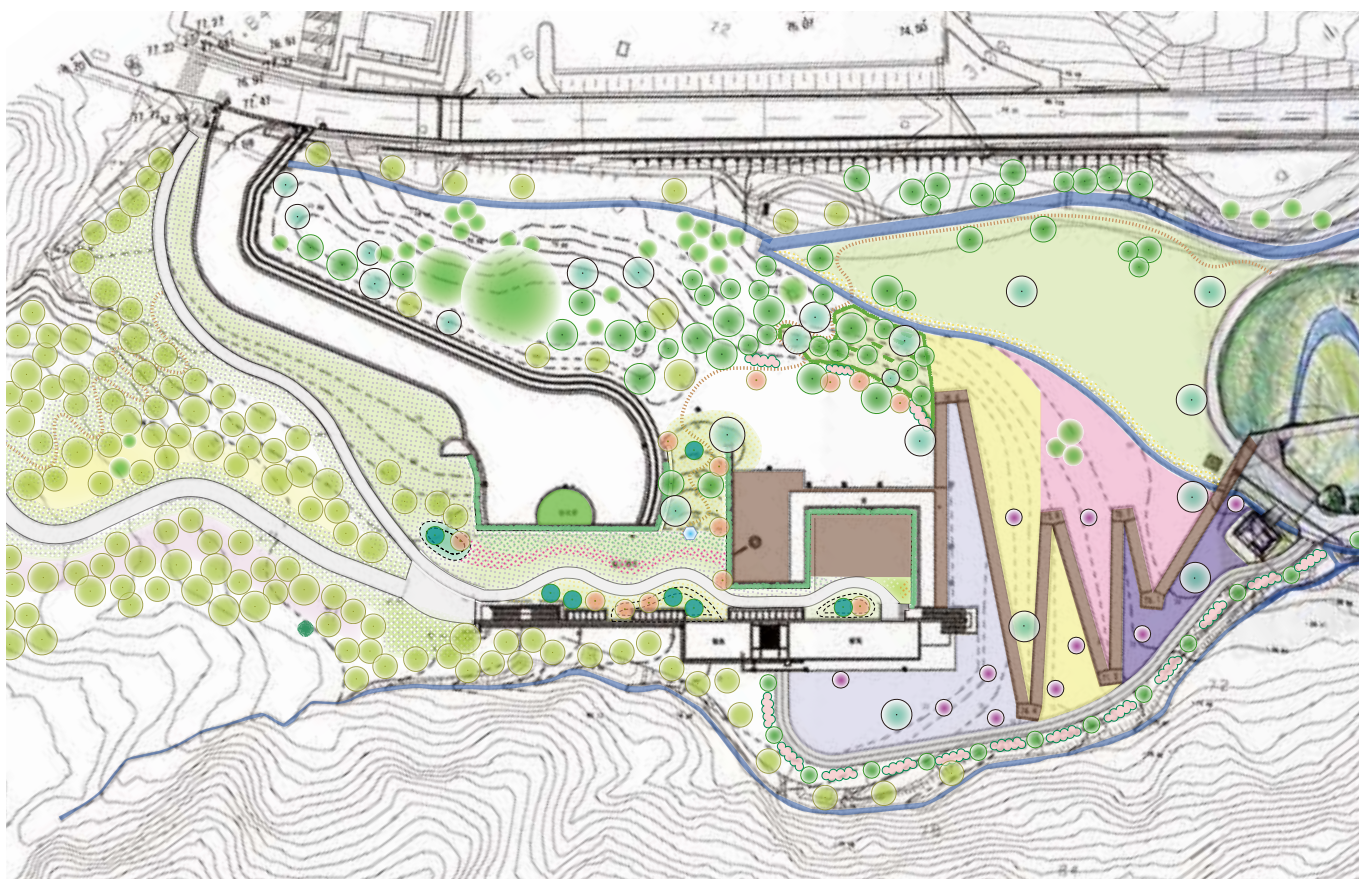


図 - 1 花の水辺区計画図

反構築のランドスケープ

ー 自然へ帰すランドスケープデザイン ー

米の消費低下およびそれに伴う減反政策により全国的に増加している休耕田、放棄水田を、本来のその土地の自然へと戻していくランドスケープデザインを提案した。水田を耕作放棄した場合、時間がたてば自然に戻るというわけではない。また周辺には耕作を継続している水田もあり、パッチワーク状に耕作地と放棄地が入り乱れると、病虫害防除という面からも大きな負担となってくる。本計画では、中山間地水田（棚田）の持つ水源涵養機能や生物多様性の場など多面的な機能を保持しつつ、美しく、やさしく本来の谷戸の自然へと戻していくことを目標とし、そのために自然へ戻っていく途上のランドスケープをイメージした。すなわち、耕作はしない、また過度な手も入れないが放棄するものではない、しかも美しいという状況の創出を試みた。

1980年代、建築の世界では「脱構築」deconstructionというムーブメントが起こった。これは建築デザインの合理主義、機能主義を解体し、新しいデザインのあ

り方、新しい美学に基づいて空間を構成することを提案したものであるが、あくまでも作るための理論であって、戻していく理論ではなかった。本件のデザイン思想は、太古の自然から始まって一旦は農地となり、そしてまた自然へ戻っていくという流れの中で、同じ線形の上で戻すのではなく、新たな線形（プロセス）を通して戻していこうという試みである。したがって一旦構築された環境・景観を解体するのではなく、さかのぼっていくという意味から「反構築」という語で概念設定した。これは今後の日本における人口減少という社会状況の中で、農地ばかりでなく、都市、工場、発電所といった近代施設の「消し方」を提案する概念にも通じていくと考えている。

3. 「花の水辺区」の整備方針

本区域の整備にあたっては次のような整備方針を設定した。

1) ストーリーの明確化

里地・里山の植生環境を明快にストーリー化し、里



2) 四季折々楽しむ野草による花世界の展開

3) 多様な生物棲息環境への配慮

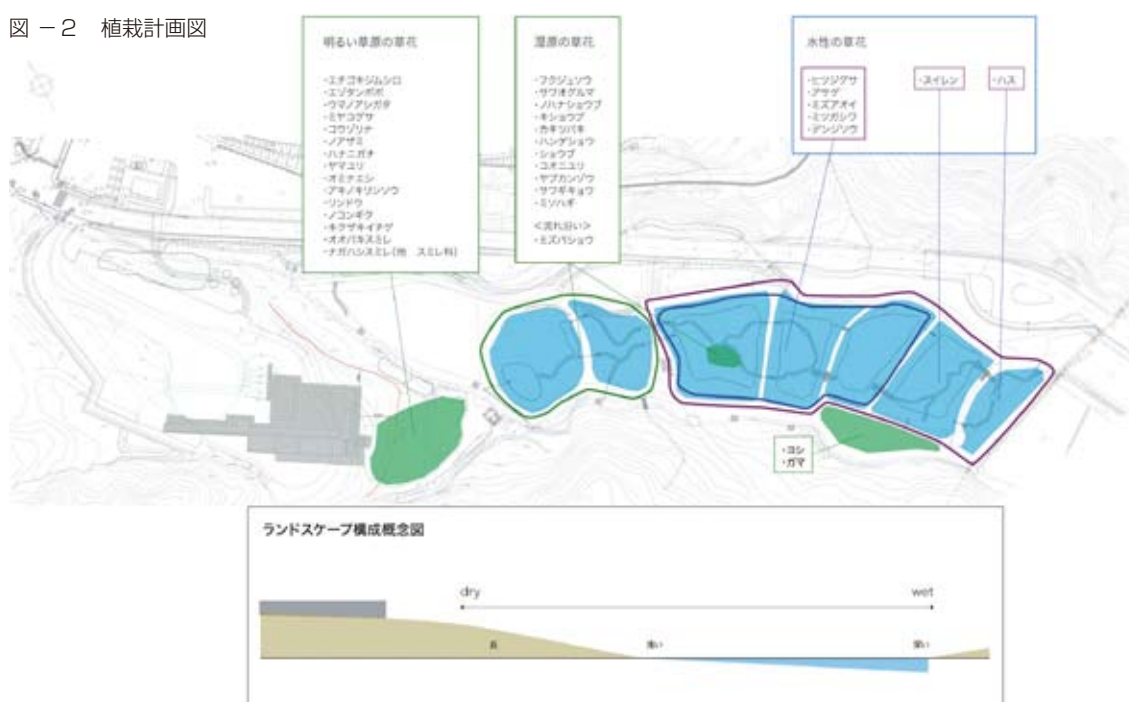
るが、施工に先立って、国営公園事務所が施工前の休耕田に棲息する貴重種であるホトケドジョウなどの水生生物や水生植物の移動を行い、本学の学生もその作業にボランティアで参加した。ドジョウの生息域に同時にどのような生物が棲息しているかを実地体験し理解するには、もっとも効果的な実習であったと考える。このように一旦救助し、また元に戻すということも「反構築」のランドスケープの一端であり、学生だけでなく、多くの市民も巻き込んで実施されればより効果的であろう。

ランドスケープデザインは、工事が完了して初めてスタートするといっても過言ではない。本件のようなケースでは、おそらく5年以上経過してやっと当初描いたイメージとなり、さらにそこから新たな景観が醸成されていくことになるだろう。そのためには草刈りや選択除草、外来種の除去など一定の人間の手を入れる、すなわち環境管理の手法が必要となる。地域の自然を理解するには、このような現場での作業を行うことがもっとも効果的であり、建設の段階から管理運営の段階に至るまで、学校教育や市民教室などを活用した様々な活動プログラムの設定が望まれる。

4. 今後の展開

「花の水辺区」は現在（平成23年7月）施工中であ

図-2 植栽計画図





模型写真

1. 本年度の活動内容

長岡造形大学では、平成14～16（2002～04）年度にかけ、長岡市からの依頼で旧長岡市内における歴史的建造物の悉皆調査を実施し、平成18（2006）年には旧長岡市域から10件の国登録有形文化財を出すに至った。

一方、長岡市は平成18（2006）年度までに栃尾市など周辺9市町村と合併したため、平成19（2007）年度からは旧長岡市域以外における歴史的建造物の悉皆調査の実施が長岡造形大学に委託された。

平成22（2010）年度は旧中之島町、旧和島村地域において歴史的建造物について悉皆調査を行った。日程は平成22（2010）年7月から9月にかけて現地調査を実施したものである。調査の方法は住宅地図に基づき、公道より望見できる範囲内で当該地域における全ての建造物を確認の上、概ね建築後50年を経た建物を中心として写真撮影を行い、一部で聞き取り等を実施し、建築構造などを項目とした調書を記録として作成した。調査対象物件は和島地域1,300件程、中之島地域3,200件程の合計4,500件程で、この中から和島地域で226件、中之島地域で257件の歴史的建造物などを確認した。

なお、2011年度日本建築学会北陸支部において以下の報告を実施している。

- ・平山育男・西澤哉子：長岡市和島・中之島地域における茅葺民家について 長岡市歴史的建造物悉皆調査(8)
- ・平山育男・西澤哉子：長岡市和島・中之島地域における真壁造の土蔵について 長岡市歴史的建造物悉皆調査(9)
- ・平山育男・西澤哉子：長岡市和島・中之島地域において幣串を妻面に有する歴史的建造物について 長岡市歴史的建造物悉皆調査(10)
- ・平山育男：長岡市和島地域における木製ごみ箱について 長岡市歴史的建造物悉皆調査(11)

2. 和島、中之島地域における茅葺建物

・茅葺建物の分布

和島地域では38件、中之島地域では4件の茅葺建物を確認することができた。（図2）

和島地域では茅を露出するものが存在せず、いずれも金属板で被覆するものであった。また、38件の内、1件が宗教系の建物であった。和島地域は島崎川の支

流が網の目のように西山山塊に伸び、平野と丘陵の境目際に丘陵を背に立地する集落ごと、茅葺の民家が数棟立地するというのが典型的な姿であった。

一方、中之島地域は信濃川と刈谷田川に挟まれた一面の沖積平野である。鞍掛神社本殿の他、1件は移築を近年受けた建物のようにであった。

・出現率

和島、中之島各地域における茅葺建物の出現率を見ておきたい。分母は各地域における平成23（2011）年2月1日現在の世帯数として見たものである。

これによれば和島地域における茅葺建物の出現率は2.8%と、これまでみた長岡市域では小国地域の3.8%に次いで高い値となる。

一方、中之島地域の茅葺建物の出現率は0.1%で、これは平野部に位置する越路地域及び長岡地域の0.1%に準ずる低い値となっている。

なお、かつて見た長岡地域においても、茅葺建物は丘陵地に多く、平野部では極めて少数であったことを数量的に示すものと言えよう。

・小結

長岡市和島及び中之島地域における建造物の悉皆調査において、和島地域では38件、中之島地域では4件の茅葺建物を確認することができた。茅葺建物の分布は丘陵沿とするものが多く、和島地域の茅葺出現率2.8%は長岡市内においてもやや高い数字と見ることができると判明した。

3. 和島、中之島地域における真壁造の土蔵

ここで言う真壁造の土蔵とはこれまで、

- ①外部から望見できる範囲で軸組までを柱外面で納めるもので、梁組以上、鉢巻部分は大壁とする形式として紹介してきたが、今年度の調査においては更に、
- ②鉢巻部分のみを塗込めて大壁形式とする
- ③隅柱以外を大壁とする形式

も見出し、合計3種類に真壁造形式の土蔵を分類することができる。

・真壁造土蔵の数量

和島地域では6件の真壁土蔵を確認できた。この内、①の柱部分を真壁造とするものは4件、②の鉢巻部分のみを真壁造形式とするものは2件が確認された。

一方、中之島地域では17件の真壁土蔵が確認され、

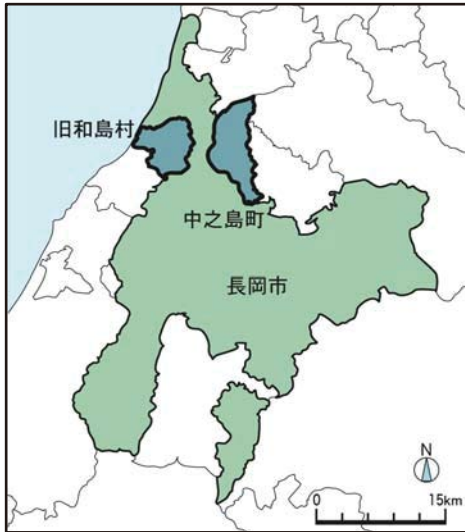


図1 長岡市和島村・中之島地域

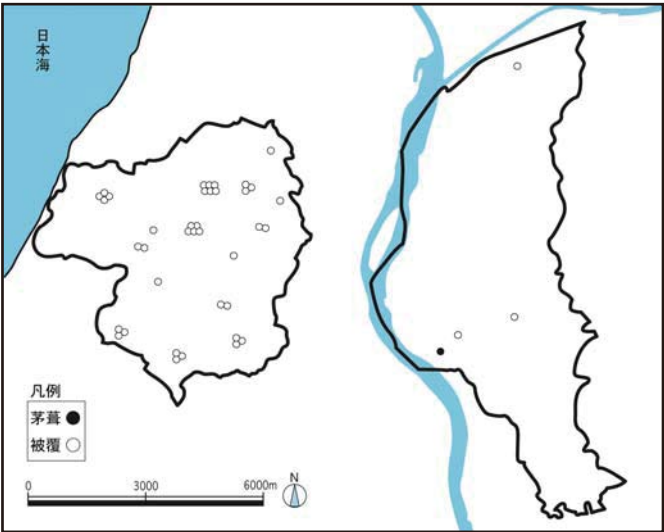


図2 長岡市和島・中之島地域における茅葺民家の分布



写真1 和島 妙満寺本堂



写真3 和島 FM家住宅家屋



写真2 和島 乗光寺本堂



写真4 中之島 鞍掛神社本殿